

山を歩き、湖にカヌーを浮かべ、大自然と向き合う日々。何百年、何千年と変わらない風景に身を置いてみると、心が安らぎ、癒されてくるのを感じます。

——モデル・アウトドアエッセイスト 木村東吉さん

アメリカ・ミネソタ州のカヌーショップで出会った光景から、すぐそこにカヌーのある暮らしを追い求めて河口湖畔へ家族とともに移住しました。それから14年、70年代、男性ファッション誌のカリスマモデルとして活躍したナイスマグイは、季節の移ろいも美しい大自然の中で、日々、歴史に学び、輝く未来を見つめています。



悠久の時の流れを肌で感じ、自分もその一部なのだ。実感する日々

「日々の暮らしの中にいつもカヌーを」と、河口湖畔に家を立て、14年前に家族とともに移り住んだ木村さん。実際に暮らしてみると、日々表情を変える富士山の景観や樹海散策など、他にも多くの楽しみがあることに気づきました。「僕はよく足和田山から三湖台まで歩きます。三湖台から眺めると、その昔、一つの大きな「せのうみ」という湖があり、それを1300年前の宝永の大噴火で流れ込んだ溶岩が西湖と本栖湖と精進湖に分けたという歴史が一目でわかるんです。樹海にしてもそうです。例えば風穴。かつて小さな池があつて、そこに溶岩が流れ込んで水蒸気で一気にグワーッと盛り上がったのが、時を経て落



インタビュー

モデル・アウトドアエッセイスト
木村 東吉さん
Toukichiro Kimura

プロフィール

1958年大阪生まれ。18歳でモデル活動を始め、男性ファッション誌やCMなどで活躍。80年、ミネソタ州800kmを、自転車・マラソン・カヌーで縦断するレース「ミネソタ・ボーダー・トゥ・ボーダー」に日本人として初めて参加。このとき見た光景がきっかけとなり、95年、家族とともに河口湖町（現在の富士河口湖町）に移住。著書に「森と湖の生活」（光文社）「こんな暮らしが良かった」（山と溪谷社）など

盤して200mも続く巨大な洞窟になったという。この辺りは、そういう、何百年、何千年の歴史を肌で感じられる場所なんです」と、楽しそうに話します。「僕は、カヌーの素晴らしさのひとつは人力でゆったりと動くことだと思っています。同じように、人間が神様から与えられた力、すなわち自分自身のスピードで歩くと、自然との一体感も生まれ、見えてくるものもいっぱいあると思うんです。自然の中には、昔の風習とか生活習慣も見え隠れしていますからね。そういうものを感じながら、山へ登り、自然の中を歩くと、『ああ、自分もいつかこの

一部になつていくんだろっな』という思いが溢れてきて、自然に気持ちと和んでくるんですよ。悠久の時の流れを感じることに究極の癒し、これこそが大自然の最大の魅力だと木村さんは力を込めます。**アウトドアの神髄は、日常にフィードバックすることにある**

ところで、木村さんといえばアウトドアということで話を向けてみると、「便利で快適になりすぎた都会生活のなかで、もう少し人間らしく、もう少し動物らしく生きていこうというのが自然回帰の原点だと思っんです。アウトドアは自然回帰ですが、原始生活やサブイバルとは違います。僕はアウトドアライフ自体も好きですが、そこで学んだことを日常生活にフィードバックしなければ意味がないとも思っているんです」とのこと。便利で快適な日常生活のありがたさに気づき、無駄を削ぎ落とす機会となるアウトドアは、都会生活で鈍ってしまった人間本来の警戒心や緊張感を呼び覚ますきっかけにもなるといいます。「それに、都会生活では大人の男が活躍できるシーンなんてあまりないですよ。でも、アウトドアでは、テントを張るにしても、薪を作るにしても、お父さんの力が欠かせない。家族の結束も強まるんですよ」。来春スタート予定のカヌーやアウトドアクッキングの体験教室も、

本当の目的は世の父親の復讐なんだと、こっそり教えてくれました。

「山梨は自然の博物館」
他県にはない「現代の伝説」
を作り、次世代の子ども達に胸を張れと伝えたい

仕事柄、世界各地を訪れている木村さん。その経験を生かした仕事の依頼も多く、現在もスイス政府観光局のアドバイザーを務めています。「雄大な自然と複数の世界遺産を有し、国を挙げて観光に取り組んでいるスイスは、山梨と通じるものがあると僕は思っているん

です。つい先日、スイスが全世界に向けて『スイス・モビリティ活動』を発表しました。これは、マウンテンバイク、カヌー、ハイキングなどのルートでスイス全土をつなぎ、人力でスイスの観光を楽しんでくださいというもの。全世界に先駆けて実施する、究極のエコツーリズムです。さまざまな自然の魅力を持つ富士山、八ヶ岳、南アルプスなどを有する『自然の博物館 山梨』も、こうした取り組みが可能だと思うんですよ。山梨県内を人力で見回れるような提案をすることも、山梨の魅力アップする一つの手だと思っんです。それに、地球環境保全につながるのなら、それ自体が

山梨の売りにもなるでしょ。山梨は、そういう”伝説”を作っていくべきだと思う。そして、僕らの子どもや孫は、そんな取り組みがあることに胸を張れるじゃないですか。僕はね、彼らには、何百年、何千年と続いてきたこの山梨の自然の歴史を世界に誇れるよう、何かの形で残してやりたいと、心から思っんですよ」。未来への大きな提言もいただきました。

終始微笑をたたえながら、ときに熱く、ときに優しく、山梨を語ってくれた木村さん。山梨を想うその一言一言が、心の奥に響きました。



上:透明度の高い西湖でカヌーを楽しむ木村さん。空を飛んでいるかのような、爽快なひととき。左:専門学校生へのアウトドアの授業は、10年以上も続く夏の恒例行事。



河口湖畔にあるサンタフェ・スタイルの家。自慢のリビングからは、河口湖が見下ろせる。